

第5回

「命を大事にする教育を」

環境ジャーナリスト 元NHK制作主幹役職 石澤 清史

東京で「ゴミ戦争」が始まった1970年代から「ゴミ問題」の重要性についてNHKテレビや著作などを通して訴えてこられた石澤先生にお話を伺いました。特に、命を大切にする環境教育を提唱され、小学校、中学校、高等学校の教科書も執筆されています。

-NHKに入局した動機を教えてください。

1936年（昭和11年）に東京都江戸川区で生まれました。東京の下小岩小学校を卒業しましたが、小学校の教員をしていた父が若くして亡くなり、母の実家のある大分県中津市に移りました。4人兄弟の長男でしたから、中学を卒業して企業に就職するつもりでしたが、校長先生から進学するよう勧められました。その校長先生から支援も受け高校に進学しました。

高校生の頃は、文芸部や弁論部の部長を務めました。本を読むことが好きで、中学生の頃に本が沢山ある友人の家に通い、本をむさぼるように読んでいました。山本有三の「路傍の石」のように比較的読み易い本もありましたが、谷崎潤一郎など難しいものもありました。理解して読んでいたかは判りませんが、かなり多くの作家の作品を読んでいました。石川啄木も好きで200ぐらいの短歌を覚えていました。映画も好きで田山花袋の「蒲団」の感想文コンクールで全国2位になりました。

沢山の本を読み映画を観たりしていたのは、知的好奇心が旺盛だったからだと思います。小説家になりたいと思い、恋愛小説を書いていたこともありました。

父親が教員でしたし、進学を勧め援助してくれた中学の校長先生に恩返しをしなければと思い、私も教師になろうと元広島高等師範学校の広島大学に進学しました。大学では、人の倍勉強をし、英語とドイツ語の高校・中学教師の免許を取得しました。

卒業を控えていたときに、偶然、知人からNHKで職員を募集していることを教えてもらい、「NHKなら、小説を書くことができるかもしれない。映画監督のような仕事もできるかもしれない。」と安易に考え、受験し合格しました。1961年（昭和36年）にNHKに入局しました。

-番組制作の頃は、どのような状況だったのですか。

NHKは転勤の多いところですよ。最初の赴任地は岡山で、それから東京、次に広島に戻り、また東京、大阪、東京と移りました。赴任地は東京を除き、岡山、広島、大阪の3箇所でした。その中で、私を育ててくれたのはなんといっても広島です。

広島と言えば原爆です。テレビの特集番組で「きみはヒロシマを見たか」、「爆心地のジャーナリスト」などを制作しました。誰でも原爆を題材にして番組を制作しようとしますが、何に焦点を当てるかが問題で、独創性・発見性が大事です。

「爆心地のジャーナリスト」では、爆撃を受けた翌日だけ、広島の中国新聞社が新聞を発行できなかったのです。その時に発行していたら、どんな新聞だったのかに焦点を当てて制作しました。その新聞社は創業から百年以上新聞を発行していましたが、原子爆弾投下の翌日は、輪転機が壊れて印刷ができず、休刊となりました。番組を制作する場合、斬新な発想・演出が重要で、しかも多くの人々の心を打つものが重要です。

例えば、「東大100年」では、東大総長が卒業式に卒業生に贈る告辞をテーマに制作しました。卒業生がその告辞を聞き、どのように感じ、社会人となってどのように実行したのかといった、社会との関係について考えてみたいと思ったからです。どのジャーナリス

トも東大100年という節目ですから、どんな報道をしようかと狙っています。矢内原総長時代、卒業式の前日に報道関係者に「太った豚より痩せたソクラテスになれ」という原稿が渡されました。しかし、卒業式の当日まで、総長はそれが真実ソクラテスの言葉だという証拠が見つからなかったため、そのことには触れませんでした。各社は大見出しでソクラテスになることを記事にしましたが、総長が言ってないということのスcoopすることになりました。

「東大100年」では、戦後、初めて入学した5人の女子学生にも焦点を当てました。その中の一人である国会図書館に勤務していた藤田晴子さんに、安田講堂で東大紛争で壊れてしまったピアノでショパンを弾いてもらったことがあります。紛争以来の出来事で視聴者はたいへん感動したようです。

ー「ゴミ問題」に関心を持ったきっかけは。

1970年に東京で「ゴミ戦争」が始まったことがきっかけです。杉並区に清掃工場建設が計画されましたが、ゴミ収集車の臭いの問題や不動産価格の下落の懸念から反対運動が起きました。美濃部都知事は、ゴミの「自区内処理」を提唱していました。しかし、私はどの区にも建設するという発想は正しいのか疑問に思っていました。千代田区のように人口の少ない区もありますし、一律にというのは問題があると思っていました。そのため、海外に取材に行きました。杉並区と同じような規模の町がイギリスの郊外にあり状況を調べました。その町の清掃工場の周辺は牧草地で家畜が放牧されていました。地元住民に対して清掃工場の必要性について、何十回と説明会を開催していることも判りました。その時に制作したテレビ番組は「都市と廃棄物」で、アメリカ、ドイツなど主要都市の廃棄物対策について問題提起しました。

さらに、ゴミ問題については、教養特集「ゴミ学誕生」を制作し、雑誌「日報」に「世界ゴミ見て歩き」、「この人とゴミ論」を1年間連載、その後「都市とゴミ・廃棄物」、「ガボロジー（ゴミ学）」、「ゴミから地球を考える」、「リサイクルの知恵袋」等の本の執筆をしました。

ー「もったいない」を未来の子どもたちへ。

大量廃棄物社会から循環型社会への転換が求められています。環境に配慮したゴミについての行動として、3R（発生抑制：リデュース、再利用：リユース、再生利用：リサイクル）があります。2004年、ノーベル平和賞を受賞したケニア出身の環境保護活動家である故ワンガリ・マータイさんが国連本部で開催された気候変動サミット開会式で、「もったいない」精神の重要性を演説し世界に流布しました。日本で古くから言われてきた、この「もったいない」という精神は、文化遺産といってもよいでしょう。私は、この精神をととても大切なこととして、未来の子どもたちに伝えたいと思います。

ー最近の環境問題について、どのようにお考えになりますか。

ゴミの問題から、森、生き物、水の問題、今は地球温暖化やエネルギーの問題へと非常に幅広くなってきました。住民意識の高まりとともに少子高齢社会の現在は、ゴミは減少傾向にあります。一般廃棄物を焼却する清掃工場に産業廃棄物も有料で受け入れ、そのお金を自治体に回すことを考えても良いのではないかと考えています。

また、エネルギーの問題は重要です。もっと電気のありがたさを知らなければなりません。電気は止まるとは困るので、複数の電源を持っていた方がよいと考えています。具体的なエネルギーのベストミックスの比率が示せない状況ですが、日本は世界をリードしていく数値目標を立てる必要があります。努力して省エネルギーにも取り組まなくてはなりませんので、国民一人ひとりが考えていかなければと思います。

ーマスコミについて思うことはありますか。

「NEWS」はNorth、East、West、Southの頭文字をとって造語された言葉だと言われています。四方八方に目配りをするという事です。ジャーナリストは一方的な結論を主張するのではなく、幅広く多様な意見を取材すべきではないでしょうか。「NEWS」の原点に戻って自分を正さなければいけません。

－高齢化社会で私たちがやるべきことはありますか。

定年を迎えた人が、最後の日に何を考えるかに焦点を当てた「ある定年」という番組を制作したことがあります。最後の日に、残っていた自分の名刺を家に持ち帰り、自分の机の上に置くのです。これまで勤めた会社と縁が切れましたが、簡単に定年になったからといって切り離すことはできないのです。

いまや日本は高齢化に向かっている社会ではなく、高齢社会です。年を取れば取るほど知識や経験は豊富ですから、味が出る仕事があると思います。適材適所で高齢者を活かすことを考えたらどうでしょうか。年功序列の制度はやめて、成果主義の契約型にすることが良いのではないかと思います。

高齢化の問題と関連が深い課題としては、地方の問題があります。地方創生については、まず地方にお住まいの方々が主体的に考えることが良いのではないかと思います。豊かな老後のためには、まず、健康であること、生涯追求するライフワークを持つこと、そしてストレスがないことだと思います。

－これからの日本を担っていく若い方へメッセージをお願いします。

日本を良くするにはどうするかということと、命を大事にすることを考えてほしい。環境問題の原点ではないでしょうか。

46億年前に地球が誕生して以来、多くの生命が誕生しては、姿を消していきました。今日の種の絶滅は、主として私たち人間の経済活動に原因があります。

現在、科学的に明らかにされている種の数約175万種です。世界資源研究所の予測によれば、このままのスピードで種が消失すると、2020年までに全世界の生物種の5～15%が絶滅するそうです。生物種は一度絶滅すれば、再び人間の力で作ることはできません。種の絶滅は、それほど重い意味があります。

(編集後記) 本が好きで小説家になろうと思っていたという石澤先生、独創的な発想で多くの印象に残る番組を制作して来られました。番組制作のポイントは、誰でもが気づく同じようなものではなく、本当に心を打つものでなければいけないなど貴重なお話が伺えました。

ゴミ戦争から環境問題へ関心を持たれたところで、先生がおっしゃる「環境問題は命を大切にすること」は、環境の切り口として重要な視点であると感じました。

環境問題は、今ではエネルギーの問題へと幅が広がってきました。日本を良くするために考えていらっしゃる先生に感動いたしました。これからもますますお元気でご活躍いただきたいと思います。

2014年11月